

Economic Indicators

定例経済指標レポート

テーマ：貿易統計（10月）

発表日：11月24日（木）

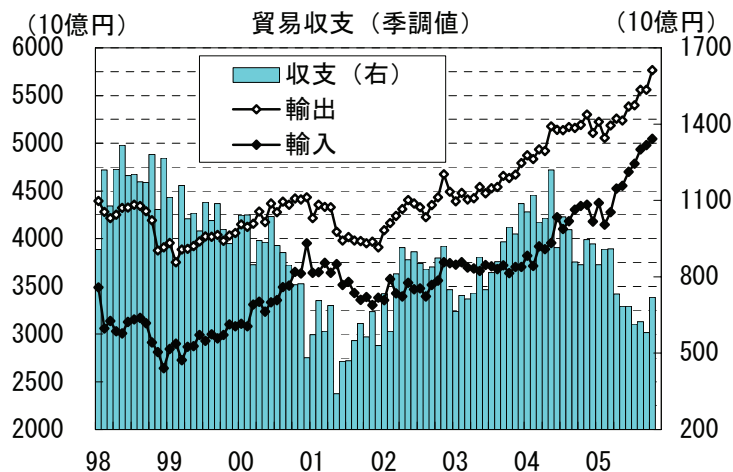
～ 輸出は緩やかに回復 ～

(No. J-166)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 新家 義貴

TEL：03-5221-4528



(出所：貿易統計・財務省)

(10億円)	季調値			原数値
	貿易収支	輸出	輸入	貿易収支
04年10月	848	5191	4343	1154
11月	947	5300	4354	597
12月	930	5108	4179	1133
05年1月	848	5223	4375	194
2月	908	5055	4147	1090
3月	910	5185	4276	1119
4月	732	5257	4525	958
5月	684	5238	4554	293
6月	684	5383	4699	869
7月	614	5399	4784	869
8月	624	5560	4936	112
9月	581	5560	4979	954
10月	720	5767	5047	822

(出所：貿易統計・財務省)

前年比	輸出金額	輸出価格	輸出数量指数				輸入金額	輸入価格	輸入数量指数			
			全体	対米	対EU	対アジア			全体	対米	対EU	対アジア
04年10月	11.7	7.0	4.3	▲ 3.7	1.2	7.9	12.7	12.1	0.6	40.7	▲ 5.4	▲ 2.2
11月	13.4	7.6	5.3	2.8	3.1	13.6	28.1	11.8	14.6	10.6	11.8	16.0
12月	8.8	5.9	2.7	0.5	3.2	6.8	11.1	8.1	2.8	16.6	▲ 0.3	4.5
05年 1月	3.2	6.5	▲ 3.1	▲ 5.2	▲ 14.6	▲ 1.5	11.4	8.7	2.5	▲ 0.5	4.2	4.9
2月	1.7	6.1	▲ 4.2	2.3	▲ 6.7	▲ 3.7	11.4	6.6	4.5	4.5	▲ 3.4	12.2
3月	6.1	4.9	1.1	3.4	▲ 9.2	1.0	7.7	6.0	1.6	▲ 1.2	▲ 5.1	4.7
4月	7.8	9.3	▲ 1.4	0.8	▲ 2.5	▲ 1.9	12.8	13.4	▲ 0.6	▲ 4.2	2.5	2.7
5月	1.4	4.0	▲ 2.5	2.0	▲ 7.8	▲ 5.0	18.7	9.2	8.7	6.8	3.5	11.0
6月	3.6	3.1	0.5	2.4	▲ 8.8	▲ 0.6	11.1	8.9	2.0	▲ 0.1	▲ 2.3	6.0
7月	4.3	5.1	▲ 0.8	▲ 1.0	▲ 2.8	▲ 4.5	11.7	12.4	▲ 0.6	7.1	▲ 4.8	▲ 1.0
8月	9.1	7.0	2.0	3.6	▲ 1.2	1.0	21.3	11.1	9.2	8.9	6.6	12.7
9月	8.8	7.4	1.3	3.4	▲ 2.7	▲ 3.1	17.4	13.1	3.8	3.8	4.8	3.8
10月	8.0	5.8	2.0	4.0	▲ 1.0	▲ 2.0	17.8	15.3	2.2	▲ 14.0	0.1	7.3

○ 原油高と堅調な内需の影響で輸入が増加

10月の輸出金額は前年比+8.0%、輸入金額は+17.8%、貿易黒字額は前年比▲28.8%となった。ほぼ市場コンセンサス（輸出+9.8%、輸入+18.5%、貿易黒字▲23.7%）通りの数値であり、意外感のない結果だ。輸出の緩やかな伸びが続く一方で、内需の底堅さと原油高の影響により、輸入金額が輸出金額を大幅に上回る増加となっていることが響いている。

もっとも貿易黒字に関しては、今後徐々にこうした状況に変化がみられてくる可能性がある。原油価格が一頃に比べて水準を若干切り下げていることの影響は、2ヶ月程度のラグを置いて輸入価格の低下に反映されてくるため、輸入の伸びは徐々に鈍化してくるだろう。後述するように、輸出も先行きも緩やかな増加が続くとみられることもあり、貿易黒字は年末にかけて徐々にマイナス幅を縮小させてくるものと思われる。

○ 輸出は緩やかに増加

実質輸出についてみると、前月比+0.7%と増加しており、7-9月期比でも+2.3%と高い伸びとなっている。輸出数量も3ヶ月連続で前年を上回っており、輸出は一時期の低迷を完全に脱したと言って良いだろう。内訳をみると、このところ改善が目立つのが、地域別では中国向け、財別ではIT関連財と自動車だ。中国向け輸出金額は、5月をボトムに足元では前年比二桁の伸びまで回復しており、回復が鮮明になっている。中国の投資抑制策の影響もようやく一巡してきたことに加え、中国国内での在庫調整に関しても調整圧力は弱まる方向にあることから、中国向け輸出に関する下押し圧力はかなり和らいでいる。IT関連財についても、世界的なIT部門の在庫調整の進捗を背景に東アジアの産業内貿易が復調してきたことから緩やかに持ち直している。また、自動車輸出に関しても、米国向けを中心に好調な推移が続いている。ガソリン価格が高水準にあることが、逆に日本車にとっては追い風になっている可能性もあるだろう。今後も日本車のシェアアップによって対米自動車輸出は好調を持続すると予想される。

このように、今月の貿易統計は輸出が足元で緩やかに増加していることを改めて確認する内容だった。11月29日(火)公表予定の10月鉱工業生産では、生産予測指数からすると前月比+2.4%の高い伸びが見込まれている。実現率の最近の動向からしてさすがにこれだけの伸びにはならないと思われるが、今月の輸出動向から判断すると、生産はある程度はつきりした増加になる可能性は高い。鉱工業生産は7-9月期まで横ばい圏内の動きにとどまってきたが、10-12月期には増加傾向が鮮明になると予想する。

先行きの輸出に関しても、米国、アジアを中心として世界経済が底堅く推移すると予想されることから、好調な推移が続くと思われる。米国についてはハリケーンの影響によって一時的に景気が減速する可能性は否定できないが、一方で復興需要も見込まれることから、基本的には潜在成長率程度の拡大基調が続くだろう。また、前述の通り中国向け輸出の下押し圧力は小さくなっていることに加え、他のアジア向けに関してもIT関連財を中心に増加が見込まれる。また、輸出の動向に先行する傾向のあるOECD景気先行指数、米国ISM製造業新規受注などでも足元改善基調にあり、今後の輸出増加が示唆されている。

なお、リスク要因としては米国のクリスマス商戦が挙げられる。世界的なIT関連財の在庫調整はほぼ終了しているのだが、韓国、台湾などにおける供給能力の増加からIT部品価格が伸び悩むなど、足元では決してIT関連財が絶好調の状態にあるわけではない。そうした中、仮にクリスマス商戦が不調に終わり、在庫が再び積みあがるような事態になれば状況は大きく変わってくる可能性がある。米国では雇用・所得環境の改善が続いていることに加え、消費者マインドも一時の急激な落ち込みからすれば持ち直していることなどから、クリスマス商戦もまずまずの結果に終わると予想するのが自然と思われるが、今後のリスク要因として注意しておく必要があるだろう。

